

ピ
ス
ケ
ス
の
子
ら

秤
お姫様ごっこ
赤い海の上で

秤

わたしは、いつもひとつ下の妹の背中を見ていた。

あまり体が丈夫でなく、体力があるとはいえないわたしに比べ、妹は赤ちゃんの頃から活力が有り余っていて、両親を苦笑させていたそうだ。

その世話に追われている間、わたしはといえばその横でおとなしく眠っていることが多く、それはそれで手のかからない、いい子だったらしい。

そういう関係は、物心がついて学校に通い始めてからもそう変わることはなかった。いや、より顕著になったというべきか。

そもそも、妹は学校へ上がる前から近所の子たちを集めて率い、わたしたちの生家は田舎だったので、森や川を駆け回って色々な虫や小さなカニを捕まえたりして遊んでいた。

わたしはといえば、そんな妹に引っ張られて連れて行かれるけれど、すぐに疲れて小さな岩に腰かけたり、火照った足を流水で冷やしながら、みんながはしゃぐのを眺めるのが役割だった。

だけど、それはわたしにとって小さな幸せだった。妹がいたらないわたしに気をかけていて、仲間として誘ってくれていたのだから。

このように学校へ入る前から近くの子をまとめていた妹だったので、学校でもたち

まち人気者になった。休み時間になれば彼女の周りには男女問わず友達が多く詰めかけ、楽しく遊んでいる。

一年早く入学していたというのに、わたしはちょっとした病気で欠席を繰り返していた上、引っ込み思案なこの性格である。特に親しい友人ができるようなこともなく、休み時間はひとりぼんやりと時が過ぎるのを待っていた。

近所の評判も、大人しい上の子と華のある下の子というもので定着していた。わたしは大人しく引っ込み思案だが、こういう細かな噂などには常に耳を立てていた。周りの評価に沿っていけば、大きな災いはない。

わたしは他人がそう見ているよりも小癪な性格なのだ。

しかし数年後、妹とわたしの間に絶望的な差をつける事件が起こってしまった。

わたしの持病が悪化して長く床に臥さざるをえなくなり、学校に行けなくなった。両親や、妹までもが自宅での療養を望んだが、診療所の先生は街の病院へ行くよう強く勧め、結局わたしはひとり、街の病院で一年近くを過ごした。

正直なところ、両親が自宅療養を望んだのは、それなりの有力者の家で妙なことが起こってはいけないという世間体のためだろう。だが、なぜ妹も。彼女も学校という

小さな社会の中で、世間体を学んだというのか。

そうした気持ちは心のなかでじくじくとわだかまり、四季の変わり映えを感じさせない病院の床と天井を見ながら、わたしはその年の夏を迎えた。

ある日の午後、日差し避けのカーテンを引いた窓の外を、コツコツと叩く音がした。この病院がある街は街といってもそんなに都会ではない。カラスか何かだろうと思つて放つておいたら、次はドンドンと手か何かで叩くような音。そして。

「おい、開けろよ！」

妹が小さく、しかしよく通る声で呼びかけてきた。わたしがとっさに飛び起きてカーテンを引くと、そこには妹がにと笑いながら、魚の泳ぐ金魚鉢を両手で持ち上げていた。

そのときのわたしの心はなんと表現すればよいのだろう。半分はわたしのことを見限ったとわたしは勝手に決め付けていた、わたしのあこがれが、目の前に現れたのだ。金魚鉢を窓の横にあるテーブルへ置いてからよつと声を入れて窓枠へ飛び移り、病室に入ってきた妹を、すぐにでも抱きしめたかった。でも、わたしはそれが怖い。妹からわたしへの好意はわたしへの負い目や、あわれな子に対する慈悲が混じりあったものなのだ。わたしは妹の感情をそう読んでいた。だから、わたしから何か行動を起こ

してしまえば妹の心は変わってしまう。

わたしはただ間抜けに半端な角度で両手を宙へ浮かせたままにすることしかできなかった。

「どうしたんだよ、そんなに突っ立って。気分悪くなったのか？」

「ううん。ただ、いきなり来たからびっくりした、だけ」

「学校があったからな。先週から夏休みなんだ。親父たちも街まで行くのは危ないってうるせえし。それに、お見舞い、持ってきてやりたかった」

彼女が指した金魚鉢の中では、まだ小さな頃に川で彼女たちが採っていた白い魚が跳ねていた。

「クチボソっていうんだ。金魚の餌で育つはずだ。悪い、勝手に部屋の凶鑑見ちまっ
た」

わたしは何も言葉に出せず、ただ頷いていた。妹がわたしのことを気にかけていてくれた。それが確かめられただけで、胸がいっぱいになり、何かがあふれ出してくる嬉しさと愛おしさを感じた。

わたしは多分、泣いていた。妹がわたしの様子に突然慌てて、魚は嫌いなのかとか、部屋に入ったのがそんなに悪かったのかとか矢継ぎばやに言い出したからだ。

この娘は、一直線すぎる。小癩で迂遠なわたしとは不釣合いなくらいに。

「嬉しかった、ただだから」

わたしにはただそう言って、慌てる彼女の肩へそっと手を触れることしかできなかった。

結局、クチボソは病院で飼うのは衛生上問題があるし、わたしが責任を持って世話もできそうにないので近くの川へ放してもらうことになった。

その代わり、あの金魚鉢を洗った後で元の窓際へ飾ってもらった。妹の単独訪問があつてからはこんな爆弾娘を放置するわけにはいかないと両親も考えを変えたのか、たまに彼女を連れて見舞いにくるようになったが、その病室にわたしと妹にししか通じない秘密の符牒があることは、少し嬉しかった。

そして季節が一巡りして雪がちらつくようになった頃に、わたしは退院した。

退院後、わたしの立場は一変していた。わたしの部屋は今まで納戸や物置のように使われていた母屋軒続きの離れへ移されていた。門と玄関が別についているので、何かあつたとき往診に来る先生にも便利だということだったが、両親がわたしを厄介に

感じていることはすぐにでも理解できることだった。

そして、入院で学校を長期欠席していたため進級が認められず、妹と同じ学年でもう一年過ごすことにもなった。理由ありの身内と同級になる妹の立場には申し訳ないものを感じたが、妹と肩を並べて同じ学年で通えることに、喜びがないわけではなかった。

妹は、わたしのあこがれなのだから。

退院が許される程度で持病は完全に治ったというわけではないので通学は飛び飛びだが、それでも妹との学校生活は楽しかった。妹の傍で彼女の活躍を見ていられる、それだけでわたしは幸せだったし満ち足りていたのだ。

わたしが入院している間に妹は父の影響から剣道を始めていて凛々しさにも磨きがかかり、そういう趣味の女子からの人気も高くなってきた。

一方で、わたしは本来わたしが背負わないといけないものを、彼女に全部負わせてしまふ負い目が心の中で渦巻き、ますます陰にこもるようになった。

ほんの少しでいいから、彼女の近くでその助けになりたい。それなのに、妹にしてみられることは何もない。

体調を崩してただ離れの天井を眺めるだけしかできないときなど、特にそういう思

いが強くなる。わたしがそういう状態になっていると、妹は学校や稽古がないときは、外の世界の話を面白おかしく話して聞かせてくれた。澁刺とした妹の瞳に映るものはすべてが輝いていて、それはわたしの心でも輝いてくれる。

妬みなんかない。

わたしは妹が放つ光を受け、ささやかながら心に光を燈せるのだから。

そうこうしているうちに、わたしはほとんど登校できなかつたがなんとか中学校を卒業できる見込みが立った。

進路や受験のことなどを考えなければならぬ時期。両親は体調も考慮に入れつつ院内学級や通信制を進めてきて、妹は無邪気に「一緒のところに行けるといいな」などと喋ってくれるが、わたしには何も考えなどというものがなかつた。

何もなし。

そんな気持ちの後押しするように、あの事件が起こった。

『一九九九年七月、空から恐怖の大王が来るだろう』

有名な予言の一節では空からだったが、実際に訪れたのは海からだった。

南緯四七度九分、西経一二六度四三分を震源地としたポナペ島沖地震。地震と津波

の影響は軽かったと報道されていたけれど、本当の問題は別の場所にあった。

地震の直後に撮影された衛星からの写真で、震源地に浮上した陸地が確認されたのだ。領土問題についての話などが新聞やニュースを賑わせたらしいが、わたしはそのことをほとんど知らない。

その直後に起こったことが、鮮烈すぎたからだ。

仮にアールライ島と名づけられたその島からは、謎の生命体とも機械ともつかない存在の群れが大量に現われ、報道や観測のために殺到していた船や飛行機に攻撃を加えたのだ。

その瞬間の映像は規制されることもなく全世界に流され、わたしはそれを離れでつけっぱなしにしていたテレビで見た。

衝撃だった。

わたしひとりが生きるか死ぬかの苦しみなんて吹き飛ばすほどの死をまのあたりにしたことで、しかし生の実感なんでものは湧かなかった。

ただ圧倒的な破壊へ、死へ魅入られてしまった。

ただちにアールライ島へはアメリカ軍を主力にした多国籍軍が攻撃を開始。しかし決定的な打撃を与えるに至らず、謎の群れはそれを意に介することも無いように周辺

の海へと進攻を始めた。群れが定住した海域は海水の組成が変化して生物は棲めず、船舶は沈む死の領域になる。そんなニュースが矢継ぎ早に新聞やテレビ、ラジオを飛び交い、しかし、そんな中でわたしたちは来年進む進路の選択を迫られていた。

終わる世界で未来を求めて、何になる。

結局、進路希望は白紙を出した。

両親はしょうがないとあきらめた顔でそれを許容し、妹はわたしの肩を掴んで同じ高校を指すよう説いた。

そのとき、妹の目に光るものがあったのをわたしは忘れることができない。

おこがましいかもしれないが、妹にとってもわたしは大切な存在だったのだ。

嬉しさを感じた。

でも、わたしはあの離れに閉じこもることを選んだ。

終わる世界の只中で、何をなすこともなく終わりを待つ。

悪くない。

どうせ最初から終わっていたわが身じゃないか。

アールライ島からの侵略者たちはいつしか深海棲艦と呼ばれるようになった。軍艦

の艦隊のような役割分担をした群れで暮らしているからだそうだ。

国連と主要先進国は共同の対策本部を発足させて深海棲艦への対策を早急に進めるということになり、詳しいことは知らないが、大学の研究室時代に関係ある分野の研究をしていたらしい父や母も家を留守にすることが多くなった。

家の仕事は家政婦さんを通して面倒を見てくれることになったが、わたしと妹の距離は急速に近づくことになった。

妹は離れにちゃぶ台と勉強道具一式を持ち込み、そこで受験勉強をすることにした。見てくれていたほうがサボれないということだが、第一志望の高校に受ければ、家を出て親戚の家へ厄介になるか寮に住まわざるをえなくなる。だから、できるだけ一緒にいられる時間を作ろうという、彼女なりの気遣いだったのかもしれない。

わたしはとにかく一緒にいられることが嬉しく、読書をしたりテレビを見ているふりをしながらじっと彼女を見ていた。

まだ願書の提出までは時間があるし、第一志望の女子校から志望校のランクを落とすともいいから、一緒の高校に行こう。そう何度も説得されたが、これだけは首を縦に振れなかった。

「多分体がついていけないよ」

「ちえ。俺様の半分でも元気だったらな」

「その分頑張ってね」

並べて敷いた布団に横たわりながら、そんな話をして夜を明かす。そんな日々が続いた冬だった。

妹は見事第一志望の高校へ受かり、寮へ入ることになった。

両親も忙しい仕事の合間を見て帰宅し、話を聞いた親戚も交えてわが家は久しぶりに和やかな雰囲気にも生まれ、彼女の合格を祝った。

「見てくれよこのワンピース。俺には似合わねえぜ」

離れで、伯母さんが合格祝いに買ってくれたワンピースを試着して見せ、そう愚痴る妹。

「フェミニンな感じも悪くないと思うけどな」

「冗談じゃねえ。そんな俺じゃねえよ。もっとうかうカッコいいやつをだなあ」

さっさと脱ぎ始めたので、わたしは一旦部屋の外に出て、彼女から呼ばれるのを待つ。

「減るもんじゃねえし。俺が気にするのはともかくそんな気にするなって」

「親しき仲にも礼儀だよ」

「まあいいや。それよりもそれ、やるよ。案外似合うんじゃないの。俺とサイズ同じくらいに細いし、俺より色っぽいところあるしな」

言うだけ言って、妹はいつもの服で部屋を出て行った。

残されたのは、彼女の残り香が少し染みたワンピース。袖を通してみたら、確かにびったりだった。

そんな秘密の一夜も過ぎ、妹は入寮のため家を離れることになった。

服と日用品を大き目のバッグにまとめた程度だからひとりで行けるのだが、折角だから一緒に行くこうと誘われ、わたしも妹から連れて行かれることになった。両親は相変わらず、仕事で多忙な日々である。

「この前のワンピース着て行くこうな」

「え、何でそんな」

「俺の高校は女子校だからな。野郎は目立つし。それに、女になった兄貴結構イケたぜ。何ていうか、不思議ちゃんってのかな」

ばれていた。

あの夜、妹が出て行ったと思ひ込んで密かにあの服を着ていたことがばれていた。

わたしは顔を真っ赤にしながら、それでも二言三言抵抗を試みたが、結局は妹の勢いに圧倒されることになる。

「カラーが高くて喉仏も目立たないし、兄貴は細いからラインも誤魔化せるって」

かくして、わたしは妹の姉として入寮の手続きへ同行することになった。バスで街に出て、そこから電車で数駅。決して複雑な道筋ではないがとにかく時間がかかるので、寮にして正解だと感じた。

手続きはあらかじめ準備していた書類を順番に提出するだけだったので楽なものだったけれど、近隣から人が集まるこの高校でも妹は目を引くらしい。早くもお近づきになろうとする子たちが寄ってきて、彼女はそのたびにわたしのことを「俺の姉貴だ。この学校じゃないが、たまに来たときはよろしくな」などと紹介するので気が気ではなく、肩を寄せて小さくなっていった。

「そういう支えないとって感じの先輩、割と好きな子多いぜ。特に兄貴は不思議ちゃんだしな」

彼女からそう耳打ちされ、わたしはますます小さくなった。

「まあ、これからは俺もいなくなってあの家にも華がなくなるし、兄貴が姉貴になってもいいんじゃないの？」

人気がなくなった校舎の片隅でそう言うが早いや、彼女はわたしを抱き寄せた。

肩口に彼女の顔が乗る。兄妹でもこんなに顔を近づけたことはない。

「寂しくさせるけど、ごめんな」

妹はゆっくりと両腕を緩め、わたしを開放する。

「その手つき、慣れてない？」

「うっせえな。こんなことするの初めてだよ。心臓バクバクだぜ。ともかく、寂しくなったら俺んとこに来いよな！」

照れ隠しにかブンブンと手を振りながらわたしを送り出す。女子人気が高い彼女のことから、てっきりあしらい慣れしてると思ったが違うのか、そう言っているだけなのか。それはどうでもいいことだと、わたしは素直に受け取ることにした。

ともあれ、わたしと妹が常に家族として生活する日々は、これで一旦中断した。

帰宅する電車の中で、向かいに座っている会社員が読んでいる新聞では、国連軍による深海棲艦への攻撃に新兵器が投入されるとの見出しが躍っていた。

わたしは終わる世界を望んでいたのに、妹に抱きしめられて、彼女の高い体温を感じて少し変わった気がする。

少なくとも、妹の未来は終わらないでほしい。

現金なものである。

三年、わたしはただ諾々と過ごした。

両親はともに大学を出てからも学問に関係する仕事だったので暇つぶしに蔵書を読んだりはしていたが、その間に繋がりを見出して形を作ることはとても難しいということが理解できた。

学校はそういうものを学ぶところなのだろう。

ぼんやりとテレビを観て、田舎でもようやくやくなんとか使えるようになったインターネットでウェブの掲示板に書き込み、寝る。そういう意味のない生活である。海底ケーブルが深海棲艦の領域に取り込まれたせいで海外との通信が衛星回線で行なえなくなつたというニュースが大きく取り沙汰されたが、わたしにはあまりピンと来なかった。田舎のネット回線はとにかく遅かったのだ。

たまに妹の学校へ姉として遊びに行くのが、わたしが病院以外で家を出る唯一の機会である。

クッキーやサンドイッチを街の店で買っていくと、妹も友達も喜んでくれる。購買部と近くのコンビニくらいしか店がない学校では、街からのおみやげは特別喜ばれる

ようだった。妹はわたしを周囲に病弱な姉として紹介してそのように接してくれていたが、そうされることごとく物足りなく、後ろめたい気分が溜まっていくのも事実だった。

わたしはこの娘の兄なのだろうか、姉なのだろうか。そして、何をしてやれるのだろうか。

妹には世話ばかりかけている。その傾きすぎた関係を、どこかで平衡にしたい。わたしも彼女を支えたい。その気持ちは日増しに募るばかりだった。

コンピュータの二千年問題が特に何もなく過ぎ去った年の半ば、国連軍は限定的ではあるが深海棲艦に対する大きな戦果を挙げたとのニュースが、すべてのメディアを賑わせた。その結果をもたらしたものが、これまで迷信や過去の遺産として埃を被っていた呪術であることも一部のゴシップ系メディアがスクープし、それが事実だったことも併せ、世の中では大きく騒がれた。らしい。

わたしは世の中の動きをあえて遮断する。テレビやネットも暇潰しのためだ。情報がほしいわけではない。

むしろ、世界はこの離れの中だけでいいくらいなのだ。

だけど、これで妹の未来くらいは終わらずに済むかもしれない。

そう考えたら、すこしいい気分になる。そんな情報だった。

世界が深海棲艦への反攻に沸いていたらしい二年目の冬。両親から重大な話があると言われ、わたしと妹は久しぶりに家で顔を合わせることになった。リビングに四人集まってぎこちない無言の時間を過ごしていると、来客を告げる呼び鈴が鳴った。

「国土交通省海事局船舶産業課技術開発官の春苑はるとのと申します」

足音もなく入ってきたのは、艶やかな黒髪をかむろに切りそろえて和服を着こなし、嫣然と微笑む日本人形のような人だった。

「それでも、一応国家公務員です。主な仕事は」

「それはもう今更のことでしょう」

春苑さんは小首を傾げて話を遮った父の方を見たが、ふたり揃って同じことを言ったのを知ると、話し始めた。

「私たちが開発している技術は深海棲艦に対抗するための技術です。すなわち、呪術メソッドの解析とその簡略化、及びその実装。簡単に言ってみれば、本来は大きな魔法円を描いて人や道具を集めて舌を噛まずに呪文を唱えてようやく行なえるような呪術を、テレビのアニメで魔法のステッキを振ると魔法が出る、というレベルにまで簡

単にする仕事です」

妹はちんぷんかんぷんという顔をしているが、わたしには少し解る。両親の蔵書に入っていた文化人類学の入門書のおかげだ。

「その魔法と深海棲艦が何の関係あんだよ。いや、あるんですか」

「深海棲艦は私たち人間や他の動物が存在する物質界とは位相が異なる世界に本体があります。いわば、この世界に出てきている深海棲艦は池に映った水月のようなもの」「水月を斬れて一人前。とか親父は言ってたけどな」

「少なすぎるんだ、達人が。それにただの機械である兵器はそういう精神面を鍛えることができない」

妹に話を振られ、彼女に剣道を教えた父が額に頭を置いた。

「ええ。ですから私たちの部署では、機械や学習で簡単に呪術を扱える技術を開発したのです。おふたりのご両親にも協力していただきながら」

春苑さんはゆっくりとした口調だが順序立てて整然と説明を続けた。国連軍が今年初めに行なった反攻作戦では陰陽道、仙術、ルーン、ウィッカ、西洋儀式魔術、ブードゥー、ムボボボなどと、世界中のあらゆる呪術を投入したものだだったこと、そして、その戦果が認められたことで各国は本腰を入れて呪法兵器の開発へ力を入れ始め

たこと。そして、日本でも国土庁を中心にしたプロジェクト・チームがこの秋にその実用化に目処をつけたこと。

「日本で開発されたのは『金枝篇』で語られるところの類感呪術を元にした技術です。深海棲艦が軍艦を模した生態なら、それにぶつけるのは」

「軍艦を模した呪術師ということね」

母が言葉を継ぎ、春苑さんは頷く。いつの間にか、その顔の笑みは薄くなっていた。「もちろん、リスクも大きいです。まずは人間と明確に敵対している深海棲艦と戦わなければならない。そして、呪術を効率よく発動させるために心身にある程度拘束をかける必要があります。一番の問題は」

「年端もいかん若者から使わんといかんということだよ。そして今日はそのために俺の娘をスカウトに来た。ゼミ時代からそうだったがな、お前は回りくといんだ春苑。発表の基本は結論からだ」

父が珍しく言葉を荒らげる。同級生だったような口ぶりだったけれど、それならこの春苑という人の歳は？ というまったく関係ないところで一瞬ぞくりとするが、すぐ思考は別の場所へ飛ぶ。

妹が、戦いに？

「私は順番が大事だといつも言ってるじゃないですか。これまでの事情を知ってもらって、そして決断してもらうために順を追ってきたんです」

「あなたの話し方は誘導じゃない。外堀を埋め立てて追い詰めるだけよ」

母も春苑さんを叱責し、お茶を一口すすると言葉を止めた。

「やるぜ」

重い沈黙が流れるかと思つた瞬間、妹は竹を割つたように結論を出した。

むしろ、両親が目を剥いて彼女の方を見ているありさまだ。父や母の叱責にも動じていなかった様子の春苑さんすら、少し動じているのか眉根が動いていた。

「面白そうじゃねえか。どうせいつか誰かがあいつらを倒さなきゃいけないんだろ？ それなら、俺がやってもやらないでも同じじゃねえか。どうせなら一番乗りを目指してやる」

立ち上がって高らかに宣言する妹の横で、わたしはただ小さく座っていることしかできなかった。

その後、両親と春苑さんは相当揉めていた。怒鳴りあいこそならなかったものの、危険性や副作用について未知の部分が多すぎるといふ話がほとんどで、それは開発に

関わっていたからこそ考えてしまう可能性なのだろう。

一方、わたしたち兄妹は離れへ退散することになった。あそこにいても、もう何もやることはないだろうから。

「本気なの？」

「俺が一回だって本気じゃなかったことがあるか？ 呪法兵器とかいうやつが使えなくても、俺は水月を斬れる。絶対に倒してやるよ」

そして、兄貴を守ってやる。そう言って肩に手をかけてくる。この三年で確実にこういう面は成長しているが、本人に自覚がなさそうなのはとても困る。

この調子だと、艦娘というのになっても、同僚の女の子に誤解を振りまき続けそうな不安感。それ以前に、今の学校では大丈夫なんだろうか。

「命に危険があるって話もあるし」

「そんなん、今の海辺じゃどこでも変わんねえよ。いつ奴らが来るかわかんねえなら、戦えるほうがいい。それに、俺は元氣すぎるんだ」

言った彼女の視線がこちらを向き、瞼がやや下がる。

「兄貴がそんななのに、俺ばっかり元氣じゃなあって気になんだよ。だから、俺も死ぬか生きるかの場所で戦うんだ」

普通の兄妹ならここで頬をぶったりするようなものだが、わたしにそれはできない。妹の秤にも、重いものが載っていたことを知ってしまったから。

わたしも妹の肩に手を回し、泣くしかなかった。

この日、初めてふたりは一緒に泣いた。

ひとしきり泣きはらした深夜。車のエンジン音で意識が引き戻された。妹を起こしてしまわないようにそっと腕を解き、そちらへ向かう。

案の定、春苑さんが家を離れるところだった。

「あら、あなたは」

会釈をして、後先を考えず切り出す。

「わたしも、艦娘に志願したいです」

頭を上げると、春苑さんの視線がわたしを頭の上から下までさっとなぞっていた。

「ううん。でもあなたは」

「そうです。でも、妹と一緒にいたいんです。守りたいというか、ちょっと違うかもしれないけど」

春苑さんは初めて困ったような表情をして、顎に指を当てながらしばらく考えてい

た。

「性別は理論上そこまで影響を与えないはずだからその点は大丈夫。ただ、あなたは」
「体調の問題ですか？」

「そっちは別に。呪法兵器を動かすための魂が艦娘だから、肉体面はそこまで要求されないし、呪術での補助もある。ただ、妹さんへの気持ちが強すぎるのが問題かな。呪術は人のイメージや想いを利用するものだけど、それが反転すると意図しない結果を招いてしまう。あなたにはそういう危うさがある」

「凶星だ。だいたいこうして春苑さんと話していること自体、妹と離れたくないからだ。」

「でもそういう気持ち、わからないでもない。通せるようなら話は通す方向で話は進めるけど、本当に大丈夫？」

わたしは無言で頷き、春苑さんの車を見送った。

組織の整備などの事情で、わたしたちには妹が高校を卒業するまで時間の猶予ができた。

わたしは妹にあの夜、春苑さんと話したことを打ち明けていないし、両親にも口止

めをした。

思えば、両親に自分から何かを頼んだのはこれが初めてかもしれない。

妹は高校で卒業証書を受け取りクラスメイトとのパーティを楽しんで帰宅し、わが家でも盛大にお祝いが行なわれた。

散々に酔った両親がふたりとも艦娘なんかには行くな、今からでも断れと散々に絡んでいたが、妹が高校に入学して家を離れて以来、久しぶりに揃った家族でのひとは、それなりに楽しかった。

そして、残された数日を、わたしたちはふたりで昔遊んでいた森や川をゆっくりと歩いて過ごした。

「いたぜ、カエルだ、カエル！」

冬眠から目覚めたばかりのカエルを両手で誇らしげに持つてくる妹の勢いに圧倒され、わたしは尻餅をつく。

「あっ、大丈夫か？ あ、カエルが逃げちまう！」

小さな子たちはいないけど、妹ひとりである頃と同じ騒がしさが戻ってきた。

そんな様子を眺めていると、世界が終わりかけたことも、世界の終わりが足踏みしていることも、どうでもよくなってしまう。

妹がいる限り、わたしは大丈夫。

世界がどうなったって構いはしない。

だから、わたしは妹を大丈夫にするために、わたしであり続けよう。

そうすれば、彼女はきつと笑い続けられるから。

妹が家を出て数日後、春苑さんがやってきた。わたしからの頼みもあって、微妙に日程をずらしてくれたのだ。既に二度目だから簡単な説明を両親に行なわれ、わたしには具体的な説明が行なわれた。

「艦娘の艦装、いわば戦闘用の衣装は精神の抛り所になるくらい思い入れの強いものがいんだけど、何かある？ 妹さんは高校の制服を選んだみたいだけど」

考えるまでもない。わたしの艦装はあれしかない。

離れに行き、タンスからワンピースとブラウスの一式を取り出す。妹の姉として、彼女と高校で面会していた頃のあの服を。

「迷いなく選んだ。ってことは、とても大切なんだ」

頷いてそれをバッグに詰める。他にはあのととき妹が持ってきてくれた金魚鉢だけ。

わたしがこの世界に残した未練は自分でもびっくりするほど少なく、そして妹に関

するものだけだった。

「本当にそれだけ？」

「はい。この中にたっぷり詰まっていますから」

車に数時間揺られて、海辺にある役所の前に着いた。鎮守府というらしい。看板に書いてある。

「鎮守府、って呼び方もなんとかしたいんだけどね。アレに関わっちゃった技術屋兼 拝み屋としては軍隊もどきにはしてほしくないわけ。いっそ陰陽寮とかのほうがまだいいわ」

愚痴っぽいことを言う春苑さんに導かれ、町役場や市役所のような建物の一角にある部屋へと導かれる。真新しいプレートには船魂宮と書かれているが、元は倉庫か何かだったと思う、突き当たりの部屋だ。

ドアを開けてみると、ぱっと見ただけで神道、陰陽道、修験道に道教、カバラ、近代儀式魔術など、さまざまなお呪術で使う呪具が所狭しと並べられ、その中央に人がひとり立てるくらいのお台がある。

「臙装を着たらその台に立ってちょうだい。そしたらあなたにふさわしい船魂が降り

てくるから。あ、船魂っていうのは、あなたを軍艦に見立てるための呪術的な核みたいなもの。人格も持つてるから、仲良くしてやってね。引っ張られるかもしれないから、それには注意」

何度目かの説明を改めて行くと、春苑さんはドアを閉めた。どうやら、ここで着替えないといけないらしい。

そこら中にある道具を倒したり動かしたりしないように注意しながら艤装に着替え終わると、春苑さんと呼ぶ。

「うん。妹さんも言ってたけど、いい姉さんっぷり。それじゃ、残りの荷物は外に出しておいて。ここからは儀式の時間」

いつも通りの和服で春苑さんは宮の中へ入ってくるが、のほほんとした気配が消えている。

「大体は自動化させたけど、初動だけはこうしておかないとね」

そう言いつつ春苑さんは掌を打ち鳴らし、意味の聞き取れない言葉をよく通る声で唱え始めた。足を踏み鳴らし、わたしの立っている台の上を一周したところで、音と声がすっと止まる。

その余韻も徐々に消え、部屋を沈黙が支配しようとしたとき、胸のあたりで声が響

いた。

『初めまして、龍田だよ』

「はっ、初めまして」

『あはは、こういうのは初めてさんかあ。この時代だとそうだよねえ』

「はい」

『私と話するときには、べつに声に出さなくていいのよ。念じるだけで届くから』

龍田と名乗ってきた船魂ときこちなく会話するわたしを見て、春苑さんは成功を確信した様子で頷くと、ドアを開けてわたしたちを外へと促がした。入ってきたときには気づかなかつたが、鎮守府の入り口近くはホールになっていて、飲み物やお菓子を好きに持って行っていいようになっていた。落ち着くまでここで待っているように春苑さんに言われ、紅茶を片手にソファに座っていると、龍田さんが声をかけてくる。

『男の子さんかあ。この業界だと珍しいけどいなくはないよ。ワケありさん？』

『妹が、艦娘志望だったんです。それが、わたしより元気すぎるからだって』

『そっかあ。あなた、体弱いみたいだからね。あなたも妹さんに引け目感じてて。って、ごめんね。魂が繋がってるからあなたの記憶、辿れるだけ辿れちゃうのよね』

『わたしにもわかつちゃうからいいですよ。龍田さんは、お姉さんとあまり一緒にい

られなかったんですね』

『まあねえ。だからあなたがちょっと羨ましくもあるわ。妹さんとあんなに仲がいいお姉さんしてたんですもの』

思わず紅茶を噴き出しそうになり、赤面してしまう。

『こっちだと、逢えるといいですね』

『ううん、天龍ちゃんあれで案外脆い子だから。案外ひとりで気を張ってるほうが生きるのには楽かも。私もあの子が好きすぎるのは自覚してるし』

孤独だから生きるのが楽。という龍田さんの言い分はわかりすぎるほどにわかる。わたしもそうだったからだ。それに、ここへ来たことだって妹の思い出がちらつく故郷を捨てたかったからかもしれない。

そんなことを話しながら紅茶を飲み終え、片付けをするでもなくぼんやり辺りを眺める。シャンデリア風照明の電球は半分くらい切れ、リノリウムの床はところどころが剥がれていた。その数を数えていたところで、表のガラス製ドアが乱暴に開く。

「新参者の登場だってえ？ 天龍様が可愛がってやるぜ！ って兄貴じゃねえか！」

「初めまして、龍田、だ、よ」

龍田さんに促がされ、スカートの端を持って精一杯の笑顔を作る。

『こら！　なんで龍田がここにいるんだよ！』

『あらあ、早速天龍ちゃんがご迷惑かけちゃったみたいねえ』

ふたりとも同じ場所で、同じ艦娘。

これで秤も少しは平らになったんだろうか。